



Veritas No.10 (2000.3.17)

目次

<図書館が変わる・図書館から変わる>

浜下昌宏（総合文化学科教授・図書館長）

<特集>「マンガ」を図書館の蔵書とするか？

丸島令子（人間科学科教授）

高橋雅人（総合文化学科専任講師）

内田樹（総合文化学科教授）

Catherine A. Vreeland（英文学科教授）

古橋右希（大学院文学研究科）

古田明子（大学院文学研究科）

合屋月子（総合文化学科学生）

<研究室から>

渡部充（英文学科助教授）

<岡田山考>

野崎玲児（人間科学科助教授）

<図書館員も変わる…>

溝口良子（図書館職員）

<図書館が変わる・図書館から変わる>

浜下昌宏 総合文化学科教授

本屋さんに入ったときの興奮、本を見つけたときの喜び、注文していた本が届いたときの包みを解くときの、包みから表れてくる本の匂い。こうしたものがやがてなくなるのだろうか。図書館から本がなくなるかもしれないように。電子図書館構想というものがある。今日、なんでも頭に「電子」が付いていく。曰く、電子マネー、曰く、電子書店、などなど、要するに物的な実体を介在せずにインターネットのデジタル情報の交換によって取引をしようという企てである。電子図書館というのは、インターネットを使って文献情報を検索し、さらに Web サイト上でテキストが読めてしまう、というのである。そうすると、図書館の建物は当然のこと、書物という物理的な実体すらも、この世から消えてなくなることになる。たしかに、図書館まで行かなくても探している書物を読めるのだから、こんな便利なことはない。しかし、「図書館が変わる」というのは、そうした情報科学技術（IT）の成果を強調したいのではない。いつの世も問題は利用する人間の側にある。たったひとつの文献を求めて世界のはてまで行くこともあるだろう。British Library や Oxford Bodleian Library 図書館の貴重書の特別閲覧室で、閉館時間ぎりぎりまで 1 行でも多く読もうとすることもあろう。もし写本も含む古い文献がデータベース化され、それが電子図書館上で一般に利用可能となれば、わざわざ出かける手間や苦労は解消することになる。それをもって安直、と批判するのは当たらない。便利なものは存分に活用すればいいのだ。問題は、繰り返すが、使う我々の側の責任である。そんな考えで、本学図書館も可能な限りリニューアルを続けていきたい。そうした、時代の流れをとくに批判しつつ、またときに先取りする改革の試みが、今年で創立 125 周年を迎えて次の時代を展望せんとする本学全体の変革の先駆けになることを願いたい。利用される学生・教職員の皆さまからの提案・助言をください。

<特集>「マンガ」を図書館の蔵書とするか？

情報の中心であるべき図書館が扱う情報というものの形態が今激しく変化しています。図書館と云う名の示すとおり、疑う事なく図書だけを収集していた時は終わりつつあるようです。

そんな中で長い間図書館にいれる資料とは考えられる事のなかった「マンガ」というものについて考えてみたいと思います。

「マンガ」は現代日本文化の中で明確な位置を占めるようになり、「マンガ」を研究する専門の課程をもうける大学も出来ました。また神戸女学院大学でも「マンガ」をテーマに論文を書く学生が出てきています。

幼い時から、多感な年頃にいたるまでの成長の過程で大きな影響を与えているものであることは間違いのないと言えます。

今回は「マンガ」を大学図書館の資料として所蔵する必要があるか、否かについて数人の先生、

学生の皆さんのご意見をまとめて特集としました。

丸島令子 人間科学科教授

図書館にマンガを入れるのは賛成です。なぜなら私は幼いときから手塚治虫のファンでよく読んでいたのですが、さすがこのごろマンガを買いに行くのはできなくて、図書館にあれば大喜びです。でもその理由より、マンガは私にとって豊かなイメージを生まれさせてくれる泉のように思えるからです。最近、ブラックジャックを読みなおしました。でも図書館が安物の喫茶店みたいにならないように願います。

高橋雅人 総合文化学科専任講師

大学の先生はケチである。お金に関してではない。研究にかかわる資料についてである。できるかぎり集める。決して捨てない。だから大学の図書館では資料が溜まる一方である。この流れは誰もとめられない。だが、誰もが困っている。これこそマンガではないか。マンガを大学図書館に入れる？ これ以上増やしてどうするのだ。

「マンガを入れるのは娯楽のためではなくて、現代日本文化研究の一端としてなのです。ご存知のようにマンガは世界に冠たる日本の文化です。マンガを研究したいという人が出てきたらどうするのですか？」

研究者ならば、二次資料は借り物でもよいが、一次文献は自分で持たなければならない。だからマンガを研究する人は既に持っていなければならない。

「それなら、マンガについて論じている二次資料なら入ります！ よござんすね？」

だがマンガについて論じている二次資料とは書籍や論文であろう。活字であって、マンガではない。研究のためにマンガを入れることは原理的に不可能なのだ。

内田樹 総合文化学科教授

「漫画の配架について」

1) いまのところ反対

2) 「漫画」を主題にした研究を指導している立場から反対するのは気が引けますが、漫画の配架はむずかしい問題を含んでいると思います。膨大な発行点数をもつコミックのうちから、真に研究に値するものを厳選するためには、「ディープな漫画読み」である教員が複数いることが必要ですが、現在は、その責務を果たしうる「漫画読み巧者」の存在が確認されていません。すでにマスメディアに露出しているタイトルだけを追うような無原則な選書では労多くして意味がないだろうと思います。しかし、クオリティの高い「隠れ漫画批評家」が本学教員のうちに潜在している可能性もあり、それを探し出すのも有意義な試みではないかとも思います。

Catherine Vreeland 英文学科教授

Kobe College Library Comics Collection

At the time a library creates a special collection, it faces the challenge of naming it. In the case of a collection of comics, the question is, of course, what is collected. Are these political cartoons? Editorial cartoons? Comic books? Comic strips? Graphic novels? What is the purpose of the collection? A Comic Art Collection has a different purpose than a Cartoons Collection, for example.

When the National Art Library of the Victoria and Albert Museum in England decided to collect 20th century comics, they not only included every format they could find, but also selected according to design and art, or even social representations of life in the 20th century. About ten years ago they had an exhibition of Japanese culture called "Visions of Japan," and they papered one of the rooms' walls with pages from contemporary Japanese comics. After the exhibit closed, they kept representative comics to add to their collection.

As students and professors on the Kobe College campus investigate, analyze, and translate Japanese comics, now is a good opportunity to begin the Kobe College Library Comics Collection. If the library could begin with an exhibition and make it the foundation of a socially relevant collection of comics, we could have the materials we need for study at our fingertips.

古橋右希 大学院文学研究科

図書館に漫画を置くことは反対です。今のところ、漫画を学問として携わっていきたいと思っている身としては、賛成すべきところなのかもしれませんが、関わっているからこそ、却って、漫画を置くことに抵抗を感じてしまいます。なぜなら、漫画を選ぶ基準については、そう簡単には決められるものではないと考えるからです。

また、漫画自体が変革期にあるので、漫画の捉え方に個人差が出てくる時期ではないかと思えます。取り入れるか否かは、もう少し未来の話にしてもよいのではないのでしょうか。

古田明子 大学院文学研究科

だいたい、図書館にマンガ論があって、原本のマンガがないというのも奇妙な話だと思いませんか。シェイクスピアは庭まであるのに。年々、研究材料としてのマンガへの需要は増えているわけですから、当然、学校のどこかにマンガを扱う機関があってもおかしくはないでしょう。ただ、マンガが図書館という空間にふさわしいか否かはまた別の問題。今のところ、マンガは学術書でも古典でもないで、シェイクスピアを読むように集中力を要するわけではありませんから。しかしながら、図書の定義が難解さにあるとも思われませんし、すべてのマンガが難解でないとも言えません。ということで、図書館に置くかどうかは別にして、マンガを図書館が扱う書物と定義してもいいのではないのでしょうか。

合屋月子 総合文化学科 4 年生

私は、図書館にマンガを入れることに、基本的に反対します。ただし、図書館の対象とする層、目的により、これは柔軟に変化して良いと思います。

学校図書館のような(特に大学の)ところでは、マンガは入れる必要を感じません。なぜなら、一般図書、特に専門書と比べて低価格で購入することができるため、学生の負担にならないため、図書館が購入する意義がないからです。また、マンガは娯楽的要素が強いものがほとんど(皆無ではない)で、資料性がないと思います。

いずれにせよ、マンガと一般図書とを平行して一つの図書館に置いていくことは難しいのではないのでしょうか？

<研究室から>

渡部充 英文学科助教授

昨年（1999年）公開された映画『マトリックス』は、一部にカルト的な熱狂をもって迎えられ、特に本国アメリカでは一種の社会現象としても話題となった。脚本ならびに監督のウォシヤウスキー兄弟のデビュー作『バウンド』のストーリー展開の歯切れの良さや、独特の翳りを帯びた映像に好印象を抱いた記憶がある。これは是非とも見たいものだと、一般公開されるやいなや映画館に駆けつけたものだ。しかし、この映画には肩すかしを食らわされてしまった。人間を超えて高度に進化した人工知能により支配される世界の中で、パンクなコンピュータ・ハッカー達がシステムに反抗を企てるという筋立ては、いくらなんでも単純明快、その図式があまりに「古典的」にすぎるのだ。これなら、サイバーパンク小説の誕生に決定的影響を与えたとされる『ブレードランナー』や、日本のアニメ『攻殻機動隊』の方がはるかに刺激に満ちたものだった。『ブレードランナー』は、人間と人工生命の差異の曖昧性を執拗に追求し続けたフィリップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』に基づき同様のテーマを扱っていた。一方の『攻殻』はハイテク・ガジェット群と人間とのマン・マシーン・インターフェイスの戯れをマニアックなまでに描き出してもいた。『マトリックス』は、状況設定や物語の斬新さというよりは、ワイヤーを用いたカンフー・スタントとコンピュータ・グラフィックスの出会いが生み出したアクション・シーンのおかげで人気を博したと言うべきだろう。

それにしても、コンピュータやロボットといった人工知能ないし人工生命(?)に支配される人類という設定は、ハリウッド映画でこれまで飽くことなく繰り返されて来たテーマである。ここにそうした映画のタイトルを列挙するまでもないだろう。今日の世界に生きる我々は誰もが、多かれ少なかれ、そうした状況が到来するだろうという暗い予感めいたものを抱いているに違いない。また、絶対的なシステムに戦いを挑む主人公達の「革命戦士」的なヒロイズムは、いくら古びているとは言え、観客受けの良いドラマを安直に製造する装置として機能してもいるのだろう。こうしたハリウッド映画の潮流は、今世紀においてユートピア文学が反ユートピア文学、ディストピア文学へと転化したという文学史における出来事と軌を一にしているようだ。じじつ、反ユートピアはハリウッドが好んで映画化してきたジャンルのひとつでもあった。今更言うまでもないが、20世紀は様々なユートピアの試みが頓挫した世紀である。第1次世界大戦は18世紀来の啓蒙という輝ける企てに暗雲をなげかけたのであったし、第2次世界大戦は人間理性や科学

に対する素朴な信頼を打ち砕いて余りあるほどの野蠻と暴力に満ちていた。社会主義国家樹立から共産制世界へという壮大な夢を抱いて誕生したソ連の企ても、あっけないほどの幕切れを迎えた。そうした中であって、コンピュータ科学に代表される数量化可能な理性だけは長足の進歩を遂げてきたと言うわけだ。こうした歴史を振り返ると、ユートピアから反ユートピアへの転換は必然的なものであったと言えるだろう。

戦後の日本社会も含めて、いわゆる先進国と呼ばれる社会では個人の欲望がほぼ全面的に肯定され、限りなく多様化、個別化するかに見える欲望の充足をめぐる経済活動が展開している。変化することだけが常数で、絶えざる変化そのものがシステムを安定させるという次第だ。それは資本制そのものに内在する性質でもあろう。そうした社会に生きるわれわれにとって、プラトンが『国家』で説いた理想国家や、トマス・モアが『ユートピア』で描いたユートピア国は理性による専制が貫徹した反ユートピア社会の相貌を帯びてくる。制度が固定され、変化することを許容しない社会は、たとえそれがどれほど「理想的」で皆が幸福に生活している社会であろうとも、管理国家として断罪され、拒絶反応をもって迎えられるのだ。別言すれば、プラトンやモアの理想国は人間の「不幸になる権利」(ハックスレー『すばらしい新世界』)や、「邪悪を選択する自由」(バージェス『時計じかけのオレンジ』)が奪われた世界として立ち現れる。もはやユートピアなどどこにも存在しないし、存在してはならない。いかなるユートピアも、それが実現した途端に反ユートピアに転化するというわけだ。もっとも、そもそも「どこにもない場所」、「どこでもない場所」というギリシア語からユートピアという言葉を造語したモアにしても、そうしたユートピアの反語性は強く意識されたいはずである。また、言葉＝ロゴスの力によってのみ現出可能なアイデアとして理想国を語ったプラトンにしても、大切なのはアイデア世界と現実世界の往還運動なのであって、単純に理想国建設の夢を見ていただけではないだろう。二人とも、素朴な理想論者であるにはリアル・ポリティクスの辛酸を舐めすぎているのだ。

いずれにせよ、ユートピストは人類なり共同体なりのある「全体」を志向する。その制覇を目指すと言った方がわかりやすいだろうか。そして、個人の思考が全体を志向するとき、あるいはひとつの普遍的な価値の樹立を目指すとき、その体系は全体主義的社会との相同性を示さざるを得ないだろう。ローカルな知を超えた普遍言語なり普遍理性の樹立の夢を見るコンピュータもまたある「全体」を志向しているように思われる。それは、無邪気でパワー・ハングリーなアメリカのビジネスマンたちを筆頭に、確実に今日の我々を機械の奴隷と化し、あるいはマン・マシン系の代替可能な部品と化しているようだ。『マトリックス』的な状況などとうの昔に到来しているのである。だからといって、コンピュータに対するラッダイト運動を起こせば良いというものでもない。そうした考え方は古典的な革命なり反抗なりのイメージに囚われすぎていて、今日的な状況の中では通用しないように思われる。

さて、反ユートピアに容易に転化する全体を志向するユートピアに対して、そうした志向性をもたないユートピアが対峙される。記述可能で静態的な状態をもたないユートピアだ。カーニバル的な祝祭の時空、「いま、ここ」で瞬間的に享受しうるある様態としてのユートピア。「わたしはシステムを構築しなければならない。そうしないと他人のシステムに捉えられてしまう」と語った詩人ブレイクにとって、ヴィジョンとしてのみ立ち現れる芸術の都ゴルゴヌーザがそうしたユートピアであった。しかしながら、芸術創造活動の特権化するなら、大方の人間にとっては無縁のユートピアであるとも言える。創造などという苦しい作業に従事するくらいなら、いっそシステムの奴隷である方が楽なことには違いない。

僕はといえば、ユートピア文学を読むこと自体をひとつのユートピアと見たいと思っている。文学作品を読むことも、ヴァーチャルな世界を生きた体験として読み手のうちに沈殿することだろう。その作品のうちに、ひとつでも自分が生きている世界にはない素晴らしい点を見出すなら、その体験が読み手の世界との関りを変容させる可能性をはらんでいる。たとえそれがどんなに取るに足りないような小さな変容であろうとも。世界のマクロな変革を志向するのではなく、自己と世界の関りかたに、本人にも意識されないくらいに微かな変容をもたらすこと。あるいはそうした変容の可能性にささやかなユートピアを認めたい。個別の人間の認識とは無関係なところで世界が客観的に存在しているわけではない。すべての人間がそのなかで生を営む単一の世界、そうした単一の世界を生成する母体としてのマトリックスなど実は存在しないのだ。ひとりひとりの人間が、世界と自己との関係を生成するマトリックスとして存在している。それがユートピアの夢を紡ぎもすれば、反ユートピアの悪夢にもうなされるのである。

<岡田山考>

野寄玲児 人間科学科助教授

岡田山には「山」という字がついていますが、岡田山は正式には「山」ではありません。また正確には「岡」でも「丘」でもありません。いつもふうふういいながら坂道を上ってくるみなさんには、こんなことを言っても納得してもらえないかもしれません。それでは岡田山はいったい何なのかといいますと、正式には「台地」という地形に該当します。もう少し詳しくいうと、岡田山は洪積世の後期（今から数万年前）に形成された上ヶ原台地の末端部に相当します。台地とは低地と比べると明らかに高いが、上が平坦になっているテーブル状の地形を指します。女学院

のグラウンドから聖和大学、さらには上ヶ原地区にある関西学院大学にかけては、海拔50m前後の平坦面が広がっています。これが「上ヶ原台地」とよばれるものです。台地の成因にはいろいろありますが、上ヶ原台地は大阪層群という海成層の上に、上ヶ原礫層という段丘堆積物が積もって形成されています。海成層とは海底で堆積した地層のことで、六甲山系から供給された大量の土砂が、古大阪湾に堆積しその後の地殻変動により隆起した地層が今の上ヶ原台地の基盤をなしています。海底の堆積物は層を成して平らに積もるので、隆起した土地も平らな形になるのです。上ヶ原台地は以前はもう少し海側まで張り出していたと思われませんが、長い年月を経て徐々に浸食されてきました。岡田山はその浸食面の最前線に位置しているわけです。こう書いても、こんなにしんどい所はやっぱり「山」だと言い張る人がいるかもしれません。以前、学生のみなさんに大学への不満を書いてもらったことがありますが、自然に関することでは「坂をどうにかして欲しい」、「蚊が多いのでどうにかして欲しい」という意見が圧倒的に多かったのを記憶しています。蚊はともかくも、山は高さ故に貴しで、どうにかしろといわれても困ります。ちなみに、女学院で最も低いところは、正門下の郵便ポストの辺りで海拔約7mです。坂を登りきった大学建物の周辺が海拔約47mですから、みなさんは毎日40mの山登り？をしていることになります。みなさんが一年間に何日大学に来ているのか詳しくは知りませんが、100日も通えば富士山よりも高く登ったことになります。また、200日も通えばヒマラヤと同じくらいの高さに……。こころへんでやめておきましょう。

<図書館員も変わる…>

溝口良子 図書館職員

先日、学術情報センターのシンポジウムに参加した。今回は将来の図書館、電子図書館、電子ジャーナルなどがテーマになっていたため、外部データベースをどのように利用していくか、増え続ける雑誌をどのような形態で購読利用するか、保存の問題はどうするか等について明快な方向性を見つけだせるかもしれないと期待して出かけた。

ほんの6時間位の間にも5つもの講演が、殆ど休憩もなく続く。

「今日はあまり暗い気持ちにならないよう、少しは明るい結末も持って帰っていただきたいのですが……」等という冗談ともつかない言葉で講演が始まるのを何となく不思議な思いで聴いていた。

よく聴いていると、外部データベースそのものについての話しも、電子ジャーナルの今後の動向についての具体的な話しも殆ど問題にはされない。

現在、オンラインで世界中のそれぞれ専門の異なる図書館との接続が可能になり、その所蔵図書を検索して、コピーを送付してもらおう事、或いは図書そのものを借り受ける事も若干の例外を除いて可能となっている。また、日々発表される数々の論文のタイトル、抄録、或いは全文をオンライン上でサービスするシステムも、その検索、配信のシステムともども商品化されて出回っている。それらを十分に活用出来るようになることは、単なる時間の問題であって、今問題としているのは、それから先図書館の役割はどのような展開をしていくのかということのようだ。

つまり、「大学にとって図書館は必要なのだろうか。」それから「図書館が必要であるとするならば、そこに図書館員は必要なのだろうか。」と行き着くところはこの2点に絞られてくるのである。それで講演者の方のおっしゃる「暗い気持ち・・・」の意味がわかって来た。

大学にとって図書館は、これまでコレクションしてきた種々の蔵書を保存し、学内のみならず、学外の広い範囲の研究者の方々に提供する場所としての大切な役目がある。ということから図書館の必要性がそう簡単に否定されることはない。

しかし「そこに図書館員が必要か？」というとても簡単な問題ではない。利用者が必要な資料をオンラインで検索し、所蔵館をつきとめ、それを利用するとなると、ある一定の場所へ要望のあった資料を取りに行く人、それを利用者に届ける人、つまりコピーして包装する人、それを宛先に届ける宅急便屋さんか郵便屋さん、これだけあれば事は足りる。論文の記事であれば、もっと簡単に、自分のコンピュータに取り込む、或いはEメールで送ってもらうように指示する等という方法もある。

つまり図書館員の必要性は「その存在がもたらす効果と、そこにかかるコストとのバランスによって社会が判断することになる」ということである。

では、「その存在がもたらす効果」とは何か？

私達図書館員はここ何年かの間に矢継ぎ早におこって来た、図書館業務の電子化に一生懸命取り組んできた。そして自館の蔵書のデータベース化が着々と実現化してくるのに伴い、沢山の業務がコンピュータを介して行われるようになってきている。長い間図書館員固有の仕事と考えられてきた業務の範囲が大きく変わってきている。

活字離れの激しい今、この図書館で時間を過ごすことに魅力を覚えてもらえるような空間にするにはどうすればよいのか？どんな資料を収集し、どのように提供するのか？漠然としたテーマを携えて図書館を訪れた人に、必要な資料を見つけていただくにはどんなヒント、どんなアドヴ

アイスが有効なのか？少しでも多くの利用者に有効に資料を使っただけの事、図書館を越えた広い社会のなかに無秩序に氾濫している情報を的確に入手出来る場所として期待していただけるよう努力する事が必要なのではないか。

図書館員として仕事をしていくのなら、コンピュータが取って代わる事の出来ない仕事をしなければならぬと思うし、同時にその内容は効果とコストのバランスによる判断につねに曝されることになる。図書館で働く人の仕事が大きく変化していく現在、知識と努力の必要性は想像以上の厳しさで迫っているようだ。

<編集後記>

3月になり、春の足音を聞くたびに今年こそ何か始めよう!!と思います。新年に引き続き今年に入って2度目の決心です。皆様はどのような春休みをお過ごしでしょうか。

さて、Veritas no.10が出来上がりました。おかげ様で何とか卒業式に間に合いました。無我夢中で発行してきたVeritasですが、これからも皆様の声に耳を傾けながらよりよいものにしていくつもりです。卒業されても女学院のことを忘れずに時々、ホームページも覗いてみてください。

最後になりましたが、原稿をお寄せくださいました先生方、学生の方々本当にありがとうございました。(Veritas 編集部)